



TITLE:

# <大會抄録>モンゴル帝國における ハーン位繼承と法薛體制

AUTHOR(S):

池内, 巧

---

CITATION:

池内, 巧. <大會抄録>モンゴル帝國におけるハーン位繼承と法薛體制. 東  
洋史研究 1982, 41(3): 601-601

ISSUE DATE:

1982-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153868>

RIGHT:

通しており、兩者の間には何らかの關係があるのではないかと考えられる。

本發表では、以上のような戰國時代の無内銅戈をてがかりに、楚文化の獨自性と、その朝鮮半島との關係について私見を述べてみたい。

### モンゴル帝國におけるハーン位繼承と

#### 怯薛體制

池 内 功

チンギス・ハーンがモンゴリアを統一する際、彼と主従關係によって結ばれた家臣團 *noġod* の果たした役割は大きい。一般に、*noġod* (*ol noġod*) は、遊牧戰士が舊來のモンゴル氏族制社會の束縛を離れて個人的に遊牧首領に服屬したもので、平時には遊牧首領の家人として家事労働に従事し、戰時には戰士として遊牧首領の基幹兵力となったとされている。チンギス・ハーンは、この *noġod* を主體に怯薛を組織し、自らの權力機關としたのである。怯薛の職掌は *noġod* の職掌を組織化したものであり、怯薛は、ハンの日常生活に對する様々な奉仕・身邊の護衛・家産の管理などに役割分擔してあつたほか、戰時には親衛兵としてハーンに従つた。やがて、チンギス・ハーン國が膨脹擴大してくると、ハンの側近に仕える怯薛の中からは、ハンの委任をうけて國政を擔當する者、千戸・百戸あるいはダルガチとして各地方の支配にあたる者が輩出し、怯薛は、モンゴ

ル帝國高級官僚出身母胎の觀を呈した。

ところで、問題は創業者チンギス・ハーンとの主従關係をもつ人材を要所に配置して發展してきた國家の體制が、チンギス・ハーンの歿後、モンゴル帝國において、いかに繼承されていったのかである。というのも、オゴタイ・グユク・モンケ・フビライの各皇帝は、ハーン位繼承以前に、それぞれ自らの *noġod* と怯薛を擁しており、即位後における彼らの怯薛と前皇帝の怯薛とのかねあいが微妙となるからである。そこで本報告では、ハーン位繼承と怯薛體制とのかわりを取り擧げて考察してみたい。

### イル汗國におけるモンゴル人

志 茂 碩 敏

十三世紀の半ば、フラグの征服活動に従つたモンゴル帝國の西方出先機關「アーゼルバイジャン軍政府」、「ヒンドゥスターン・カシミール鎮守府」、「ホラーサーン總督府」の諸勢力とモンゴリアからフラグに同行してきた多くの部族軍はやむを得ぬ事情でイランを中心とする西アジアの地に留ることとなり、遠征軍の總司令官フラグを開祖とするモンゴル王朝イル汗國が成立した。必ずしもフラグ家に直屬しない様々の勢力からなる征服軍がそのまま居つて成立したイル汗國におけるモンゴル人達の構成は複雑で、彼等のイル汗國一代の動向は從來十分に解明されてはいなかったが、『集史』その他の史料から考證していくとだいたい以下のように整理される。